



第99代県議会議長に就任した 中村 省司さん

■なかむら・しよじ 昭和20年3月5日生まれ。早大商学部卒。東洋経済新報社記者、鎌倉市議を経て、昭和54年から県議に連任6選。この間、平成5年鎌倉市長選に立候補するが落選する。胸には議員バッジとともに、北朝鮮による拉致被害者の全員奪還を求めるブルーバッジを常に付けている。

もつと国に「モノ」を申す

「第100代の1つ手前の99代というのは、しっかりやれ、という神の啓示だと思っています」

自民党県連きっての政策通として知られる。松沢成文知事の政治活動について調査した98条委員会の委員長を務めた。「松沢知事は衆院議員から転身したので当初は困るのばかり見ていたが、近ごろは県内にもよく目配せするようになった」と評価しつつも、「県民本位の姿勢を忘れてきたときには、きちんと対応しますよ」と話す。

県は知事、議会が



ともに住民を代表するといふ「二元代表制」というのが建前。しかし、圧倒的な情報を持つ知事に対し、議会は権限の点でも、与えられたスタッフの人数でも少ない。「課題ごとに議会局内の役割を超えたプロジェクトチームを作るなどすれば対応はできるはず」と、対応策を模索中だ。

大学在学中、万博を見るためカナダのモントリオールを訪れた。ベトナム戦争中で、大学は学園紛争の真っ盛り。広い世界に触れ、「公のためになる仕事をしよう」と考えたという。経

済誌記者を経て、鎌倉市議に挑戦し28歳で初当選。当時は革新市政で、「議会を空転させたりして、元気のいい1年生議員でした。鎌倉での議会経験で、本当に多くのことを学びました」と振り返る。

県議は6期目のベテランだが、今でも県民から「県議会って何をやっているの」とたずねられるという。「県はよく(国と市町村の間にあるという意味で)中二階に例えられるのだから、もつと国に対して『モノ』を申し、県民に情報発信しないといけない」と力を込める。

ジャズから長唄まで、音楽は何でも好きだという。時間があれば剣道やゴルフに汗を流す。鎌倉市浄明寺に妻、節子さん(58)と長女、優子さん(30)、長男、康彦さん(28)と4人暮らし。(楠田寿宏)